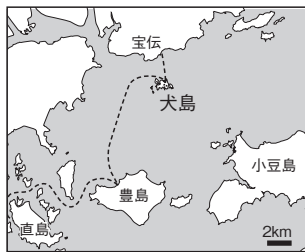
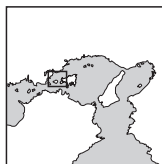


3

いぬじま
犬島 (岡山市岡山市)

島人もくつろげる 喫茶空間を運営

カフェ「sinasima」オーナー/インターン 垣本 早智



犬島：岡山市の東部沖合2.2kmにある岡山市唯一の有人島。面積約0.54km²、周囲約3.6km、人口47人（平成30年1月現在）。古くから花崗岩の産地として知られ、銅の精錬業などで隆盛を極めた時代には、人口5,000～6,000人を擁した。温暖な瀬戸内海式気候に恵まれている。

証券会社から島の美術館へ

岡山市唯一の有人島である犬島の現在の人口は五〇名ほど。周囲約四キロメートルの小さな島には福武財団が運営する犬島精錬所美術館があり、三年ごとに行われる瀬戸内国際芸術祭の会場の一つにもなっています。二〇一六年の芸術祭では六万人を超える方々が来島しました。観光客に「大島には美術館や海水浴場、宿泊施設や飲食店はありません。しかし病院（週一回の巡回診療）、駐在所や消防署、小中学校、コンビニはありません。バスやタクシーなどもない」と現状をお話すると、多くの人から「暮らすのが大変じゃないですか？」と聞かれます。

私は岡山県出身ですが、生まれ育ったのは山に囲まれた場所、島とも海とも縁がありませんでした。犬島との関

わりは二〇〇九年に始まり、今年で一〇年目を迎えます。

二〇〇八年、私は証券会社で派遣スタッフとして働いていました。リーマン・ショックを受け、派遣切りも増えるなかで、別の仕事を考えていた矢先、アート系イベントのボランティアで知り合った友人から「犬島の美術館で働かないか」と誘われました。ボランティアの際に触れた「アートと人と地域のつながり」が印象的だったこともあり、採用面接を受けることを決意、幸いにも仕事に就くことができました。当時は島に会社の寮もなく、本土のアパートから毎日船で通勤しました。

美術館での仕事は、ステークホルダーの利益を最優先に考える金融業とは異なり、公益性を重視するもの。特に島の方々が誇りに思えるような場所・施設を、良い状態で継続的に運営していくことが重要なポイントでした。私自身



2015年11月にオープンしたカフェ「simasima」。

礼がしたいと、そこから急ピッチに作業を進め、二〇一五年にカフェ「simasima(しましま)」をオープンしました。私の店には方針があります。一つ目は「島の方がほしいものをつくる」、二つ目は「来島された方に犬島の思い出が残るような場所にする」です。

島の方々に「カフェで食べたいものがある?」と聞くと、「パンがほしい。島外から買ってくる、ほかの荷物と一緒にになって潰れてしまい、悲しい」という答えが返ってきました。そこで、店では好みのパンを聞き、予約制で焼いて提供しています。

観光客などに提供するメニューには優先順位をつけています。①島で昔から食べられていたメニュー、②島や瀬戸内海で採れる食材をメインとしたメニュー、③島を楽しんでもらう体力をつける(お腹を満たす)メニューの順を意識しながら、季節ごとに提供する料理に工夫を凝

らしています。これには、二〇一六年の芸術祭の企画「食のフラム塾」に参加したことも役立ちました。島で食べられてきた料理などを聞き取り、フグ出汁の玉子丼などのメニュー化につなげました。

食事を提供する際、島の方からうかがった昔話も併せて伝えると、とても喜んでくれるお客様が多く、そのことを伝えた島の方々も喜び、日々の暮らしの励みになっていくようです。

カフェ運営と介護職を兼業

私は当初からカフェのみで生計を立てようとは考えていませんでした。店には住民も来られますが、メインは観光客です。春夏が繁忙期で、秋から冬にかけて徐々に閑散期に入ります。美術館勤務を通して把握していましたが、犬島は季節の繁閑の差が大きいと思います。また土日祝日と平日、瀬戸内国際芸術祭の開催年とそうでない年といった違いも、来島者数に大きく影響します。

お客様が少ない時期にどうやって収入を得ていくのか。そこで私は、閑散期(お客様のいない曜日)には別の仕事を



島の方に教わったフグ出汁のお雑煮。



カフェでくつろぐ島の女性たち。

することにしました。いくつかの選択肢のなかから、カフェを開業する前に少し携わっていた香川県の豊島^{てしま}での介護の仕事を選び、週に数日通っています。

豊島は、犬島からも見える人口一〇〇〇人の島で、保育所から中学校まであります。老人ホームや福祉施設もあり、フェリーが運航しているので、本土から島まで車で乗り入れることもできます。私は、以前から人口五〇人、高齢化率の高い犬島が、将来どのような島を目指せば良いのかを考える上で、他の島の実情を知りたいと考えていました。豊島で働くことで、犬島と豊島を比較したり、外から客観的に犬島を見直すことができ、島の独自性に気づけたと思います。

船での移動に慣れると、犬島から見える豊島や小豆島が身近に感じられるようになります。じつは、島同士のつながりで何か生み出せないかという思いが、店名に込められています。カフェの運営方針は上述の通りですが、店では豊島でとれた果物を使用したり、お客様に豊島の話をする

こともあります。昨年は、豊島の棚田で行われたイベントに犬島から出店させていただきました。犬島から来たと話すと「犬島は知つとるけど、行ったことがない」という豊島の方も多く、そのたびに「遊びに来てください！」と伝えました。今後、両島の交流が増えると嬉しいです。

移住先として選ばれる島を目指して

二〇一六年十一月、岡山市の協力のもと犬島の町内会、福武財団、島の住民の各年代の人たちをメンバーとした「犬島の未来を考える会」が発足し、私も参加することになりました。

この会では、まず島の生活で困っていることなどを出し合い、その解決のためのアプローチを段階ごとに分けて考え、実行しています。例えば、

島内交通の改善のために、超小型モビリティの電気自動車のテスト導入が始まりました。このほか、島の人口増や活性化に向けて地域おこし協力隊の受け入れも検討されています。

協力隊の導入には、ハードルがあります。特に住む家の問題です。島に空き家はありませんが、名義が故人のまままで借りる手続



安部壽之犬島町内会長と。

島からのメッセージ

●住民が楽しめる場所をつくってくれた垣本さん

現在、犬島は人口50名ほどですが、振り返ると大きく減ったターニングポイントがありました。40年ほど前、産業の柱として頼りにしていた工場が不況になり、10家族ほどがリストラで島を離れました。当時、130名ほどだった島の人口が一気に100名を切ったのです。そこから子どもの数が減り、学校は廃校に。自分自身の子どもたちも本土で仕事を見つけ、移り住みました。仕事がないため、島に戻ってくることはありませんし、利便性の高い本土での生活に慣れた人たちに、不便な犬島に帰ってこいとも言えません。

人口が徐々に減っていくなか、それでも住み慣れた島で生きていきたいと、住民たちがそれぞれ考え、買い物支援を仕事にしたり、飲食店を開業したりと起業は当たり前のように行われていました。美術館ができる前のことです。美術館ができてからは、垣本さんを含め、犬島にゆかりはないものの、島の環境を気に入って店を開業した若者が数名います。

垣本さんとは、彼女の美術館勤務時代から話すことが多く、飲食店を開くと聞いたときには島人の楽しめる場所が一つ増えると、嬉しく思いました。同時に、本当にやっていけるのかと心配したものです。

今後移住した人たちには、町内会や地域の仕事を少しずつ覚えてもらい、犬島の未来を託していきたいと考えていますが、まだまだ若者の数が足りません。犬島に移住するには自分で仕事を見つけ、収入をつくり出す必要があります。また、住居を見つけるなど大変なことも多いかと思えます。「犬島の未来を考える会」などの島の組織と岡山市が協力しながら、移住希望者の負担を減らすことができればと考えています。

まずは一度、犬島にお越しください。

(犬島町内会長 安部壽之)

垣本早智 (かきもと さち)

岡山県出身。2009年より5年間、公益財団法人福武財団が運営する犬島の美術館に勤務。2015年11月、カフェ「simasima」を開業。2016年に発足した「犬島の未来を考える会」に参加し、島の振興に取り組んでいる。カフェのフェイスブックやInstagramに犬島の写真などを掲載。

きが進められない、高額な改修費用がかかってしまうといった課題を解決しなければなりません。着任できても、任期終了後の仕事が島にないので、自身で起業せねばなりません。改めて振り返ると、私が定住できたのは、島の美術館で仕事をしてきた時間があつたことが大きいと思います。もし、犬島への移住を考えている方がいたら「期間限定で

も良いので、とにかく島で仕事を探して、島と関わる時間を持つこと」を勧めます。これまで犬島の未来を想像し、自分のできる範囲で行動に移してきました。これからは犬島の未来を考える会とも協力しながら、移住先として犬島が選ばれるよう取り組んでいきたいと思っています。